

後期中期英語における XVS 語順について —The Book of Margery Kempe と The Shewings of Julian of Norwich

小林 美樹

要 旨

本稿では ME 後期の散文作品、The Book of Margery Kempe と The Shewings of Julian of Norwich に現れる XVS 語順を、この語順に起こる動詞の特質と X 位置に現れる要素が担う機能という観点から分析し、英語が辿った V2 言語から非 V2 言語への変化の途上で、これらの作品がどのような特徴を見せているのかを考察する。

Julian では文頭要素の多様性が保たれており、また他動性のある他動詞の XVS 語順が広範に起こる。さらに、前置された他動詞の目的語や前置詞句が、先行談話とのリンキング機能を果たす例が多く見られる。

他方、Margery においては、文頭に起こる要素の多様性が減少しており、また、他動詞の XVS 語順での使用も限定的になっている。その一方で、文頭位置のディスコース上の機能は、特に前置された目的語において OE の特徴を留めている。即ち、文法構造的な変化である V2 の消失と、文頭位置のディスコース上の機能の変化は必ずしも平行して進んでいない様子が認められる。

1. はじめに

Old English (OE) 期に基本的に V2 言語であった英語は Middle English (ME) 期に非 V2 言語へと変化していく。本稿では ME 後期に属する 2 つの散文作品、

The Book of Margery Kempe (以降 Margery) と The Shewings of Julian of Norwich (以降 Julian) に起こる XVS 語順を観察し、これらの作品の XVS 語順が、英語が辿った V2 から非 V2 への変化の過程のどのような段階にあるのかを考察する。

次節では、英語がほぼ非 V2 言語となった時期である Late Middle English (LME) に起こる主語以外の文頭要素の機能を考察した Bech (2014) を概観する。続いて 3 節で XVS 語順に起こる動詞の特質と X 位置に現れる要素が担う機能という観点から、Margery と Julian の XVS 語順を分析し、4 節でこれら 2 つの作品の考察をまとめる。

2. Bech (2014)

OE は厳密な V2 言語ではない。文頭に主語以外の要素が現れる際、特に主語が代名詞の場合は、XVS ではなく、XSV の語順になることが多く、また主語が完全名詞句の場合でも、必ず XVS になるわけではない。しかし、X が疑問詞、否定辞、*þa*, *þonne* (then), *nu* (now) のどれかである場合には、主語が代名詞であっても高頻度に VS 語順になる。また、Haeberli (2007) によると、OE の散文において、X が疑問詞、否定辞、*þa*, *þonne* (then), *nu* (now) 以外の要素であっても、主語が完全名詞句、動詞が自動詞の場合、8 割が XVS 語順を示す。従って、OE は厳密な V2 言語とは異質であるものの、原則的には V2 言語の性質を示していたと考えられる。この V2 言語としての特質は ME 中に失われ、英語は非 V2 言語へと変化する。

Los (2009, 2012) は、英語が V2 から非 V2 へ変化するにつれて、‘bounded’な言語から‘unbounded’な言語へと移行したという見解を示している。‘bounded’な言語では、ナラティブにおいて時系列が明示的に表現されるのに対し、‘unbounded’な言語では時間相は暗示される傾向がある。Los によれば、‘bounded’な言語であった OE においては、動詞に先立つ文頭位置、即ち XVS (また、XSV) の X 位置は、先行する談話との関連性を示す要素が現れることが多いということにな

る。一方で、SVO 言語へと変化した英語においては、先行する談話との連結性を示す役割は主語が担うことが多くなる。主語よりもさらに前の位置は有標となり、この位置に現れる要素は場面設定の役割を担うことが多く、談話連結の機能を担うことは少なくなる。

Bech (2014) は、OE と LME の散文を資料として、主語や動詞に先立つ文頭の X 位置に起こる前置詞句を調査し、時代が新しくなるにつれてこの位置に前方照応の要素が現れることが少なくなっているか、また、OE と LME ではこれらの前置詞句の機能がどのように変化しているかを観察し、上記の Los の仮説を検証している。先行する談話との連結機能に焦点を当てた調査であるため、指示詞または定冠詞を含み、且つ付加詞として機能する前置詞句に焦点が当てられている。(1) のように前置詞の補部が一語であるものと、(2) のように前置詞の補部が名詞句であるものに分けて、OE と LME の違いを考察している。なお、補部である名詞句が後置修飾されているものは除外されている。

(1) **Æfter þysum** wearð ge-leaht seo geleaffulla Eugenia
 after DEM was caught DEM faithful Eugenia
 ‘After this the faithful Eugenia was caught’ (ÆLS 46)

(2) **And in that cete** is the cepulcre of Aristoty
 ‘And in that city is the sepulchre of Aristotle’ (Mandeville 9)

Bech (2014: 517)

表 1 が示すように、補部が指示詞のみである前置詞句が XVS 語順に現れる場合に関し、OE と LME の間で顕著な変化が起こっている。OE においては 61.8% の割合で起こっていたが、LME の資料では 0% となっている。一方で、完全名詞句を補部とする前置詞句に関しては、ほとんど変化がない。これは、LME において VS 語順が高頻度を保っているのは提示構文・存在構文、また非対格動詞の現れる文であるためとしている。これらの構文においては空間付接詞が文頭に来ること

が多く、また、こうした空間付接詞は *in these ylis* ‘in these isles’, *in that ilke lond* ‘in that same land’ のように、前置詞の補部として「指示詞+名詞」という形をとることが多い(Bech 2014: 518)。

表 1

	Old English		Late Middle English	
	1 word	1+ words non-postmod. NP	1 word	1+ words non-postmod. NP
XVS	61.8% (21/34)	83.0% (44/53)	0.0% (0/16)	86.0% (37/43)
XSV	78.6% (22/28)	64.5% (20/31)	50.0% (7/14)	57.1% (20/35)

Bech (2014: 518)

また、VS 語順を導く前置詞句の意味範疇に関しては、表 2 が示すような変化が見られるということである。

表 2

	Old English		Late Middle English	
	XVS	XSV	XVS	XSV
space	27.6% (29/105)	7.1% (5/70)	69.4% (59/85)	11.6% (8/69)
time	41.0% (43/105)	47.1% (33/70)	2.4% (2/85)	26.1% (18/69)
manner	8.6% (9/105)	25.7% (18/70)	21.4% (18/85)	37.7% (26/69)
contingency	1.0% (1/105)	4.3% (3/70)	2.4% (2/85)	4.4% (3/69)
respect	13.3% (14/105)	10.0% (7/70)	0%	7.3% (5/69)
participant	7.6% (8/105)	2.9% (2/70)	4.8% (4/85)	7.3% (5/69)
other/undecided	1.0% (1/105)	2.9% (2/70)	0%	5.8% (4/69)

Bech (2014: 521)

OE では VS 語順の文を導く前置詞句は、時間や場所を示すものが典型的である。他方、LME では場所を示す前置詞句の割合が大きく増加し、また様態を表わす前置詞句も増加している一方で、時を示す前置詞句が VS に先行する位置に現れる割合は大幅に減少している。LME において XVS の X の位置に起こる前置詞句の大半を場所句が占めているのは、前述のように、英語が V2 から非 V2 に向かう中で LME においてもなお VS 語順が起こることが多い構文は存在構文であるためである。

Bech は文頭の前置詞句が様態を表わす割合が LME において増えていることにも注目し、これも文頭の前置詞句が先行文との連結の機能を果たすことが少なくなっている 1 つの表れであるとしている。文頭におかれた様態表現は、前文との連結を明示することもあるが、より一般的にはその様態表現と共に起る動詞が表わす行為に強く結びつくものであり、フレームセッターとしての機能の方が前方照応的なリンキングの機能よりも際立つということである。

Bech は、結論として、文頭の前置詞句が前文とのつながりを明示する割合が次第に減少していく傾向が認められるが、この変化は LME ではまだ決定的なものではなく、V2 言語としての特徴を失ったことに伴う変化として、文頭の X 位置の機能がはっきりと変わるのは、LME を超えてさらに新しい時期、Early Modern English(EModE)になってからなのかもしれないとしている。

次節以降で、Margery と Julian に見られる XVS 語順を考察する際、どのような動詞がこの語順に起こるかということに加えて、X 位置に起こる語句が前方照応の機能をもつかどうかも検討する。特に現代英語で倒置語順に起こらない動詞が Margery と Julian において語順に関しどのようなふるまいをみせるのかという観点と、文頭の X 位置に起こる要素がどのような性質をもっているのかという観点から、これらの作品がどの程度 OE 的な古い文法を保持しているのかということを考えてみたい。

なお、Bech は英語の文頭位置の性質の変化について、主にこの位置に現れる前

置詞句をデータとして論じているが、Speyer (2010)による文頭位置の目的語の研究にも触れている。OE では目的語が前文脈とのつながりを担うために文頭に置かれることがあったが、このような目的語の話題化は次第に減少し、現代英語では目的語は対比される場合以外は文頭に現れることはない。

以下の Margery、Julian の XVS 語順の考察においては、X 位置に現れる目的語も対象にし、OE がもっていた V2 言語の性質がこれらの作品にどの程度残されているのかを考える。

3. Margery と Julian

3. 1. 作品について

Margery は 1373 年にイギリスのノーフォークに生まれた女性マージェリー・ケンプの自伝である。彼女は神の啓示を受け、エルサレム、ローマなどヨーロッパ各地に巡礼の旅に出る。Margery は彼女の晩年に口述筆記により書かれたものである。

ジュリアンはマージャリー・ケンプに先立つことおよそ 30 年、1342 年頃に生まれたとされている。30 歳の時に重病をわずらい、キリストの幻視を得、この神秘体験をもとに長い年月をかけて神の愛についての思索を重ね、書物を表した。それが『神の愛の啓示』である。

ともに LME に属する女性神秘家の作品である Margery と Julian について、これらの作品に現れる XVS 語順を、特に動詞と文頭要素に焦点を当て考察する。

3. 2. OE 的な古い語順

OE は基本的には V2 言語であり、特に主語が完全名詞句である場合には、定動詞が文頭から 2 番目の位置に置かれることが多い。また文頭には様々な要素が起こる。従って現代英語では起こらなくなった様々なパターン of XVS 語順が見られる。英語が非 V2 言語になりつつある LME 期の作品である Margery と Julian の

XVS 語順を考察するに際し、まず、どのパターンの XVS 語順を OE 的な古い語順と見做すかを整理する。

現代英語では以下のような環境で XVS 語順が見られる。

- (3) a. [Plainly detectible] **were** the scars from his old football injury.
- b. [In this rainforest] **can be found** the reclusive lyrebird.
- c. [Across the river] **lived** seven dwarfs.
- d. [Now] **comes** the time to make peace.
- e. [Thus] **ended** his story.
- f. [In the year 1748] **died** one of the most powerful of the new
 masters of India. (Haeberli(2010:18))

述語が前置された *be* 動詞構文 (3a)、場所句が前置された受動構文や非対格動詞構文 (3b-c)、また、[Now]、[Thus]、[In the year 1748] のような副詞に導かれた非対格動詞の構文 (3d-f) では、現代英語でも VS 語順が可能である。しかし、(4) が示すように、現代英語において他動詞は原則的に VS 語順に起こらない。

- (4) * [In this rainforest] **can find** a lucky hiker the reclusive
 lyrebird. (Haeberli(2010:18))

従って、現代英語において標準的には起こらなくなった以下の (5(i)-(ii)) を「OE 的な古い語順」とみなす。

- (5) OE 的な古い語順 (ME 期に次第に消失に向かった語順) :
 - (i) 他動詞や非能格動詞の VS 語順
 - (ii) ① *be* 動詞を伴う文での述語前置、② 受動文や非対格動詞が現れる文での場所句前置、③ 非対格動詞構文において *thus* などのある特定の副詞 (句) が文頭位置を占めること、これら以外の要因で引き

起こされる VS 語順

3. 3. Margery

3. 3. 1. XVS に起こる動詞

まず Margery において最も一般的に見られる XVS 語順の例を示す。X の位置には ‘than’ が圧倒的に高い頻度で起こる。その他、ther、her、anon、now などが VS 語順を導く。なお、例文については紙面の都合により Margery Kempe を MK として示す。

(6) And [than] **was** sche rygth glad and mery, (MK I 2404)

‘and then was she very glad and merry’

(7) [Than ther] **fellyn** gret thunders and levenys and many

reynes (MK I 2799-80)

‘Then there occurred great thunders and lightning and heavy rains’

(8) [Than] **was** sche **howselyd** aftyr this tyme at the hy awter in

Seynt Margarety's Chirche, (MK I 3293-4)

‘Then was she houseled after this time at the high altar

in St Margaret's church’

(9) [Ther] **was** **pursuyd** a bulle, (MK I 1349)

‘There was pursued a bull’

(10) [Anon aftyr] **cam** a man **wech** **lovyd** **hir** **rith** **wel** **of** **good**

wil wyth hys wife and other mo, (MK I 2906-7)

‘Shortly afterwards, came a man who loved her well of good

will with his wife and other people’

(11) [Now] **gan** sche to lovyn that sche had most hatyd befor

tyme, (MK I 4185-6)

‘Now she began to love what she had most hated before’

(6-11) が示すように、他の ME 期の作品と同様、Margery でも be 動詞、非対格動詞また、受動態は XVS 語順に起こることが多い。一方で (12-15) に見られるように、他動詞がこの語順に起こることも少なくない。

(12) [Than] **had** the creatur no wryter that wold fulfyllyn hyr desyr
ne geve credens to hir felingys (MK I 66-7)

‘Then the creature had no writer who would fulfill her desire
nor give credence to her feelings’

(13) [Than] **knew** he wel that God gaf hys grace to whom he wolde.
(MK I 3628)

‘Then he knew well that God gave his grace to whom he would’

(14) [Than] **sey** sche wyth hyr gostly eye how the Jewys festenyd
ropis on the other hand, (MK I 4559-60)

‘Then she saw with her spiritual eye how the Jews fastened
ropes onto the other hand’

(15) [Than] **suffyrd** sche schamys and reprevys (MK I 2464)

‘Then she suffered shame and abuse’

しかし、これらの文に現れる他動詞はどれも他動性が極めて低い。(12)は「彼女には口述筆記してくれる人がいなかった」という意味であり、have は存在を表わしている。(13) の know は形式的には他動詞であるが、状態動詞である。また、(14) に現れる see は how に導かれる節(ユダヤ人たちが主のもう片方の手を縄で縛るようす)を目的語としているが、see の他動性は希薄である。(15)の suffer も同様であり、主語である she は行為者ではなく、苦しみの経験者である。

もちろん、(4)が示すように他動詞は現代英語では原則的に VS 語順に起こらな

い。その意味において、(12-15)のような例は、英語がこの時代においてまだ V2 言語としての古い特性を保持していたことを示している。しかし例えば 15 世紀の作品である *Malory* でも、いくつかの定型表現を除くと、他動性の高い他動詞が VS 語順に起こりにくくなっている一方で、他動性の低い他動詞は VS 語順に現れる (小林(2015))。従って、他の LME の作品と比較して *Margery* がどの程度非 V2 言語への変化を示しているのか、また V2 言語としての特質を保持しているのかを見極めるために、この作品に現れる他動性の高い他動詞のふるまいに焦点をあてる必要がある。

Margery では、現代英語においても VS 語順に起こる *say* がこの語順で頻出するのに加えて、(17-21)が示すように、いくつかの他動性が認められる他動詞や非能格動詞が XVS 語順に現れる。

- (16) [Than] **seyd** the creatur, "Lord Jhesu, this maner of levyng
 longyth to thy holy maydens." (MK I 1113-4)
 ‘Than said the creature, “Lord Jesus, this manner of life
 belongs to your holy maidens.”
- (17) and [ther] **fond** sche redy the brokebakkyd man which had
 ben wyth hir at Rome (MK I 2498-9)
 ‘and there she found the broken-backed man who had been with
 her at Rome’
- (18) [Than] **thankyd** sche God wyth alle hir spiritys, (MK I 2351)
 ‘Than she thanked God with all her spirit’
- (19) [Than] **prayd** sche in hir hert to owyr Lord (MK I 654-7)
 ‘Then she prayed in her heart to our Lord’
- (20) [Than] **cryed** thei upon the forseyd creatur to prey for hem
 (MK I 2247-8)

‘Then they cried on this creature to pray for them’

(21) [An other tyme] [ther] **sent** for hir an other worschepful lady

that had meche meny abowtyn hir, (MK I 4115-6)

‘Another time another worthy lady who had a large retinue
about her sent for her’

(17)では find、(18)では thank が目的語を伴って現れている。(19-20)では非能格動詞である pray、cry が VS 語順に起こっている。(21)は身分の高い別の夫人が彼女を呼んだことを述べている文であり、主語は ‘send for her’ という述部全体の後ろに置かれている。これらの文は、他動性が希薄である他動詞が VS 語順に起こる(12-15)のような例文や、(16)のような現代英語でも VS 語順に起こる伝達動詞の例文とは異なり、Margery においてはまだ V2 が或る程度生産的であったことを示すものであると考えられる。

3. 3. 2. 文頭要素

ここまで VS 語順に現れる動詞について見てきたが、以下では VS 語順を引き起こす文頭要素に焦点を移す。2 節で、英語が V2 言語から非 V2 言語へ変化するにつれて、文頭に置かれた多様な要素が担っていた先行文脈との連結機能は次第に主語が担うことが多くなり、文頭要素は前方照応的なリンキングの機能よりもフレームセッターとしての機能を果たすことが多くなったという Beck (2014)の研究の概略を示した。本節では(5)に示した「OE 的な古い語順」に分類される目的語前置の例を Margery から示し、その後この作品における文頭要素の前方照応機能を考察する。

(22-24)においては他動詞の目的語が前置されている。なお、ここでは VS 語順を導く文頭要素に焦点を当てるため、主語に先行する他動詞の他動性については考慮しない。

- (22) [Thes swet spech and dalyawns] **had this creatur** at owyr
Ladiis grave (MK I 1697-8)
‘This creature had such a sweet conversation at our Lady’s grave’
- (23) [Swech gostly syghtys] **had sche** every Palme Sondag and
every Good Fryday (MK I 4520-1)
‘She had such spiritual sights every Palm Sunday and every
Good Friday’
- (24) And [that] **wote my merciful modyr** ful wel (MK I 5201)
‘And my merciful mother knows that very well’

Margery では前置された目的語に続く VS 語順の例は多くはない。また、(22-24)の[]内の語句が示すように、これらの前置された目的語は前文との連結機能を担っている。15 世紀の Malory においても、目的語前置の XVS 語順では前方照応の *thys* や *that* が X 位置に現れることが多い。*aspyed* や *saw* といった動詞がそれに後続し、「誰々はこれ (この様子) を見ていた」ということを表現するパターンが典型的である。

- (25) And [all thys] **aspyed sir Palomydes**, (Malory 456: 37)
- (26) [That] **saw the Kyng** with the Hondred Knyghtes and ran unto
sir Kay (Malory 19:4-5)

目的語前置の XVS 語順において目的語が旧情報を表わすのは、この語順に多様な他動詞が現れ、従って [O Vt S] という語順がまだ生産性を保っていたと考えられる Mandeville’s Travels においても同様である。目的語前置の XVS 語順の使用が限定的になってきている Margery や Malory においても、また様々な意味内容の他動詞が現れ、より幅広くこの語順が起こる Mandeville’s Travels においても、前置された目的語は先行文脈との連結機能を担っている。[O Vt S] という目

的語前置の語順は、作品によっては現れる動詞がかなり限られてきているという点において、またこの語順の出現頻度がどのようなものであるかに関わらず、前置された目的語は基本的に前方照応であるという点で、前置詞句やその他の副詞句が X 位置に来る XVS 語順とは異質であると考えられる。

なお、主語に先行する動詞が助動詞である場合も含めると、(27)のような例もある。

(27) [Me] **hast thū drawyn**, Lord, and I deservyd nevyr for to ben
drawyn, (MK II 722-3)
'You have drawn me, Lord, and I never deserved to be drawn.'

(27)の目的語前置は対比の意味合いをもつと考えられる。(27)に先行する文は(28)であり、(27)の文頭の *me* は、(28)において *draw* の目的語として現れている *hym(him)*と対比されている。

(28) And therfor, Lord, yf ther be any man undrawyn, I prey the
drawe hym aftyr the. (MK II 721-2)
'And therefore, Lord, if there be any man who is not drawn,
I pray you, draw him to you.'

従って(27)の文頭の目的語には先行文脈との連結機能は無い。

ただし、助動詞の現れる VS 語順と語彙動詞のみの VS 語順は区別して考察した方が良いと思われる。英語が非 V2 言語に向かう ME においても、助動詞が主語に先行するパターン of VS 語順は多く見られる。*Margery* でも助動詞が主語に先行する例は少なくない。例えば(29)のように文頭要素が接続詞のみの場合でも、[Aux+S]の語順が平叙文に起こることがある。

(29) And **wolde he** not levyn hir for nowt that sche cowde sey.

(MK I 2423)

‘And he would not believe her for anything that she could say’

また、[Vt S]の語順の使用が限定的になっており、この語順に他動性が低い他動詞が起こる場合か、(25-26)に見られるような「誰々はこれ（この様子）を見ていた」といった一種の定形表現のような形でこの語順が使われる場合を除いて、ほとんど[Vt S]が見られない Malory においても、(30)が示すように助動詞が主語に先行する場合は、[X Aux S Vt]という語順に他動性の高い他動詞が現れることがある。

(30) But [the sorrow that dame Lyonesse made] [there] **may no tunge**

telle...¹

(Malory 207: 19-20)

(27)や(30)においては主語に先行し、VS 語順に起こっているのは他動詞ではなく助動詞であるため、他動詞の VS 語順の使用について考察する際には、助動詞を伴うこのような例は別枠で扱った方が良いでしょう。(27)のような例を厳密な意味での他動詞の VS 語順とみなさなければ、Margery においては、他動詞の XVS 語順において文頭に起こる目的語は前文脈との連結機能を担っているということになる。

次に XVS 語順の X 位置に現れる目的語以外の要素について考察する。Margery においては VS 語順を導く語頭の要素として **than** が頻出し、前置詞句等が VS 語順を導く例が少数であるため、これらの要素の前方照応性を一般化して論じることが難しい。しかし、XVS に起こる前置詞句が少ない中で、前置詞の補部に指示詞または指示詞+名詞が現れ、前文との連結機能を担っている例が以下のように存在している。

(31) And [wyth that] **cam** forth a woman of the same town in a pylche...

(MK I 823)

- ‘And with that came forward a woman of the same town dressed
in a pilch’
- (32) [Be this wey] **cam** I to hevyn and alle my disciplys... (MK I 3690)
‘By this way I came to heaven and all my disciples’
- (33) [On this maner] **wer** thes fals wordys **fowndyn** thorw the
develys suggestyon. (MK II 562-3)
‘In this way were these false words invented through the devil’s
suggestion’

先述のように、Margery では XVS の X 位置に現れる要素のうち、目的語は原則的に前方照応であり、また(31-33)が示すように、前置詞句も前文脈との連結機能を果たしている。

2 節で述べたように、Bech(2014)は、文頭の前置詞句が前文とのつながりを明示する割合が次第に減少していく傾向が LME に認められるが、この変化は LME ではまだ決定的なものではなく、V2 言語としての特徴を失ったことに伴う変化として、VS に先行する文頭要素の担う機能がはっきりと変わるのは、LME を超えてさらに新しい時期、EModE になってからなのかもしれないとしている。また、Komen et al (2014)によると、名詞句や前置詞句が文頭に前置された主節において、名詞句（前置詞句の中の名詞句を含む）が先行文脈への連結機能を持つ割合は、ME でおよそ 60%、EModE で 40%強、LModE で 22%ということである。Margery においては VS 語順を導く文頭要素は圧倒的に **than** が多く、文頭に起こる要素の多様性が減少しており、また、他動詞の VS 語順の使用も限定的になっており、VS 言語から非 V2 言語への変化はある程度進んでいる。その一方で、極めて高頻度で起こる **than** 以外の文頭要素に注目すれば、前置された目的語や前置詞句(前置詞の補語である名詞が後置修飾されていないもの)には基本的に前方照応機能が認められる。文法構造的な変化である V2 の消失と、文頭位置に置かれた要素

の談話的機能の変化は同時平行で進んだのではないことが MK においても確認された。

3. 4. Julian

3. 4. 1. XVS に起こる動詞

Margery や他の ME 期の作品と同様に、Julian においても be 動詞や非対格動詞が XVS 語順に起こる例が多く観察される。紙面の都合により、例文に関しては Julian を JN として示す。

(34) A, [hard and grevous] **was** His peyne... (JN 646)

‘Oh, hard and grievous was His suffering’

(35) And [in this deyng] **was browte** to my mynde the words of
Criste... (JN 615)

‘In this dying was brought to my mind the words of Christ’

(36) And [also] [to prayors] **longyth thankyng**. (JN 1434)

‘And also to prayers belongs thanking.’

しかし Julian では Margery に比べてより多くの他動詞が XVS 語順に起こる。

(37) [In this] **shewid our Lord** that the passion of Him is the
overcomming of the fend. (JN 502-3)

‘In this our Lord showed that the passion of Him is the
overcoming of the fiend.’

(38) [Than] **browte our Lord** merily to my mynde, *Where is now*
ony poynte of the peyne or of thin agreefe? (JN 760-1)

‘Then our Lord suggested to my mind, *Where is now any point*
to your pain or to your grief?’

(39) [Than] **undertakyth** he penance for every synne... (JN 1318)

‘Then he undertakes penance for every sin’

(40) [Here] **understond** I sothly that al manner thyng is made redy
to us be the grete goodnes of God... (JN 1362)

‘Here I understand in truth that all manner of things are
made ready for us by the great goodness of God’

(37-40)に現れる他動詞は状態動詞ではなく、目的語に対する主語の働きかけの意味をもつ他動性を備えた他動詞であり、これらの例は、次節の(41-45)の例と合わせて、Julian において他動詞の VS 語順は Margery や Malory よりも高い生産性を保っていることを示している。

3. 4. 2. 文頭要素

次に XVS 語順の X 位置に現れる要素について考察する。前節で示した他動詞の VS 語順の例 (37-40) は、副詞や前置詞句が前置されたものであるが、Julian において他動詞が VS 語順に起こる場合には目的語が文頭に置かれることが多い。

(41) [Other sight ner sheweing of God] **desired** I never none till the
soule was departed fro the body. (JN 51-2)

‘I never desired other sight nor showing of God till the soul
left the body.’

(42) And [this] **will** our Lord, that we willen and trowen... (JN 270-1)

‘And our Lord wants us to trust’

(43) [This] **saw** I bodily... (JN 352)

‘I saw this physically’

(44) And [al this] **shewid** He ful blissfully... (JN 466-7)

‘And He showed all this full blissfully’

(45) [These words] **seyd our Lord**... (JN 501-2)

‘Our Lord said these words’

(46) And [this] **ment I** when I seid he shall be scornyd at domys day...

(JN 530-1)

‘And I meant this when I said he shall be scorned at Doomsday’

前節で Julian では他動詞の VS 語順が Margery に比べより広範に用いられていることを示した。目的語が前置された XVS 語順に絞って観察した場合でも、*desire, will (=wish), see, show, say, mean* など多種類の他動詞が起こっており、(37-40) に現れる様々な動詞と合わせて考えると、この作品は他動詞の VS 語順が限定的なものになっていく様子を示していないと言えるだろう。

また、(42-46)が示すように、Julian では[X Vt S]の X 位置の目的語において前方照応の *this* や *these* が高頻度に現れ、前文脈との連結機能を担っている。一方、目的語以外の文頭要素、特に前置詞句においても、(35)、(37)、(47-48)が示すように、前置詞句内の指示詞が前文脈との連結機能を果たしている。

(47) And [to this understandyng] **was the soul led** by love, and
drawne be mygte in every shewing. (JN 1629-30)

‘And to this understanding was the soul led by love, and
drawn by power in every revelation.’

(48) For [in this onehede] **stond the life of all mankinde that shall be**
savid. (JN 327)

‘For in this oneness stands the life of all mankind that shall be
saved.’

さらに、XSV の語順も対象とした場合、X 位置に起こる指示詞が直接的に前文脈との連結を示す例が散見する。

(49) And [al these] our Lord shewid me in the first sight...

(JN 298-9)

(50) [Of this] it is spoken in the eighth Revelation...

(JN 397)

Julian ではこのような例が Margery よりも数多く現れる。従って Julian において文頭位置に現れる主語以外の要素が果たす役割は、Margery と比較して、英語が基本的に V2 言語であった OE 期のものに近いと考えられる。Julian は他動詞が Margery よりも自由に XVS 構文に起こるという点で V2 言語の文法特徴をより強く示しており、また、X 位置に起こる主語以外の要素が前文とのリンキングの機能を担うことが Margery よりも頻繁であるという点において、OE のディスコース上の特徴をより堅固に受け継いでいる。

4. まとめ

本稿では ME 後期の作品である Margery と Julian に起こる XVS 語順を観察し、それぞれの作品においてこの語順に起こる動詞の特質と X 位置に現れる要素が担う機能を考察した。

Margery においては文頭に起こる要素の多様性が減少しており、また、他動詞の XVS 語順での使用も限定的になっている。これらの点では V2 言語から非 V2 言語への変化が進んでいる様子が観察される。その一方で、前置された目的語や前置詞句（前置詞の補語である名詞が後置修飾されていないもの）には基本的に前方照応機能が認められる。これは、文法構造的な変化である V2 の消失と、文頭位置のディスコース上の機能の変化は必ずしも同時平行で進んだのではないことを示している。

一方 Julian では、文頭に *than* が頻出する Margery に比して文頭要素の多様性が保たれており、また他動性のある他動詞の XVS 語順が広範に起こる。文頭要素の担う機能については、XVS と XSV の両方において、X 位置に前置された他動詞の目

的語、またこの位置に起こる前置詞句（補語である名詞が後置修飾されていないもの）に指示詞が現れ、先行談話とのリンキング機能を果たす例が多く見られる。

Los (2009, 2012) によると、V2 言語から非 V2 言語への変化に伴い、XVS（また、XSV）の X 位置に、先行する談話との関連性を示す要素が現れることが多かった OE は、先行する談話との連結を示す役割は基本的に主語が担う ME へと変容したということである。Bech (2014) は OE と LME の散文を資料としてこれを検証し、文頭の前置詞句が前文とのつながりを明示する割合が次第に減少していく傾向が LME に認められることを示している。しかし、この変化は LME ではまだ決定的なものではなく、V2 言語としての特質を失ったことに伴う変化として、VS に先行する文頭要素の担う機能がはっきりと変わるのは、LME を超えてさらに新しい時期、EModE になってからなのかもしれないとしている。

こうした Bech (2014) や Los (2009, 2012) の研究に照らすと、Margery は、文法構造的な変化である V2 の消失と、文頭位置のディスコース上の機能の変化が必ずしも平行して進んでいない点で ME の典型と言えるのかもしれない。他方 Julian では、OE がもっていた V2 言語としての文法的特徴と、また文頭位置のディスコース上の機能の両方が、共にある程度保たれ、大きくは消失に向かっていない。上述の同時並行性に欠ける変化は、V2 の消失という変化がかなり進んだ段階になって初めて見えてくるものなのかもしれない。今後は Margery や Julian と前後する時期の作品を研究対象として、英語が非 V2 言語へ変容する姿の詳細を辿りたい。

注

1. (30)の文は、他動詞虚辞構文において目的語が前置されている例とみなすこともできる。虚辞である *there* に導かれる文が否定辞を伴い、「～する者はいない」という《存在の否定》を表わす場合には、ME 期においても他動詞が起こることがある。この他動詞虚辞構文は原則的に助動詞を伴うということも、他動詞そのものが主語に先行することは限定的であったことを示すものであろう。

資料

The Shewings of Julian of Norwich. Ed. Georgia Ronan Crampton. TEAMS Middle English Text Series. Medieval Institute Publications. Kalamazoo, Michigan. 1994.

電子テキスト ≪ <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/crampton-shewings-of-julian-norwich> ≫

The Book of Margery Kempe. Ed. Lynn Staley. Medieval Institute Publications, Kalamazoo, Michigan. 1996.

電子テキスト ≪ <http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe> ≫

参考文献

Bech, Kristin (2014) “Tracing the Loss of Boundedness in the History of English: The Anaphoric Status of Initial Prepositional Phrases in Old English and Late Middle English,” *Anglia* 132(3), 506-535.

Haerberli, Eric (2007) “The Development of Subject-verb Inversion in Middle English and the Role of Language Contact,” *Generative Grammar in Geneva* 5, 15-33.

Haerberli, Eric (2010) “Investigating Anglo-Norman Influence on Late Middle English Syntax,” *The Anglo-Norman Language and Its Context*, ed. by R. Ingham, 143-163, York Medieval Press, York.

小林美樹 (2015) 「Malory における文頭要素と倒置・非倒置語順に関する考察」
『神田外語大学紀要』第 27 号, 1-22, 神田外語大学.

Komen, Erwin, Rosanne Hebing, Ans van Kemenade and Bettelou Los (2014) “Quantifying Information Structure Change in English,” *Information Structure and Syntactic Change in Germanic and Romance Languages*, ed. by Kristin Bech and Kristine Gunn Eide, John Benjamins, Amsterdam. 81-110.

- Los, Bettelou (2009) “The Consequences of the Loss of Verb-second in English: Information Structure and Syntax in Interaction,” *English Language and Linguistics* 13(1): 97-125.
- Los, Bettelou (2012) “The Loss of Verb-second and the Switch from Bounded to Unbounded Systems,” *Information Structure and Syntactic Change in the History of English*, ed. by Anneli Meurman-Solin, María José López-Couso and Bettelou Los, 21-46, Oxford University Press, New York.
- Speyer, Augustin (2010) *Topicalization and Stress Clash Avoidance in the History of English*, De Gruyter Mouton, Berlin/New York.